平和研所内会議

2011 年 10 月 3 日(月) 開催
テーマ:「エアシー・バトルの背景」
報告者:八木 直人(客員研究員)

概要

はじめに

米国国防省は 2010 年の『4 年毎の国防見直し(Quadrennial Defense Review)』において、"A2/AD"について言及し、これに対応する「エアシー・バトル(AirSea Battle)」構想を提唱した。この作戦構想の内容は公文書等で明示されておらず、必ずしも明らかではないが、米国の軍事戦略が変化の過程にあり、地政学的な脅威への準備がなされつつあることは明白である。ここでは、「エアシー・バトル」構想が生み出されてきた背景や A2/AD の概念を分析し、中国の A2/AD 能力に言及して、米国の戦力投射戦力の意義を明らかにする。

1 A2/AD(Anti-Access and Area-Denial)の系譜

冷戦期間中、米国の安全保障体制は、抑止と前方展開を主軸とした軍事戦略を展開し、海外に相当規模の戦力を配備してきた。しかしながら、イラク戦争終了後の 2003 年、CSBA のクレピノビッチは、「これらの状況が存在せず、前方基地の長期的生存が不可能になりつつある」と指摘している。その理由は、第 1 に、前方展開と戦力投射能力が冷戦後の戦略環境によって多大な課題に直面したからである。その課題とは、作戦概念の変化(駐留～遠征)、政治的制約(同盟～有志連合)、地理的要因(基地ネットワークの再編)である。第 2 に、その変化によって、沿岸部や内陸部の敵対勢力は、米国の作戦に迅速に対応可能である。つまり、A2/A2 能力が概念化されてきたのである。A2 とは「同盟国に対する米国のアクセスを阻止(阻害)すること」を目的とし、AD とは「紛争地域における米軍の行動の自由を抑制すること」を目的としている。第 3 は、地域諸国の A2/AD 能力が飛躍的に拡充され、顕在化していることである。例えば、同盟国に対する外交的圧力、対抗部隊の内陸部配備、目標施設の防御強化・聖域の設定、弾道・巡航ミサイルの機動・分散化、航空機のステルス化、ネットワーク攻撃等である。

2 中国の A2/AD 能力;「ドラゴンの棲家(Entering the Dragon's Lair (RAND,2007))」

ランド研究所(RAND)は、2007 年に「ドラゴンの棲家に侵入する(Entering the Dragon's Lair)」を公刊、「中国の A2 概念と能力」を分析し、中国の A2 戦略と米国に対する影響を考察した。この報告書は、中国の A2 能力の形態が米国との紛争を想定している有力な仮説であり、「中国が米中紛争において、米国の軍事作戦に最大の影響を及ぼす方法を検討している」と分析している。中国の A2/AD 能力の特徴は、例えば、人民解放軍の

© Institute for International Policy Studies 2011

「ハイテク状況における局地戦」ドクトリンである。それは中国の軍事的弱点の認識と相対的強点の極大化によって、敵の弱点を利用する戦略であり、奇襲・先制攻撃が中心である。RAND の分析する中国軍事戦略の特徴は、「ハイテク状況下の局地戦」や「先制・奇襲攻撃」、「直接的対峙の回避」等、米国に対する非対称脅威に主眼が置かれている。また、その政治戦略として日米同盟の制限や外交的強制が予測され、同盟国の基地の有効性の削減や中国近郊海域での米海軍作戦の妨害も指摘されている。中国の A2/AD 戦略に対しては、(1) 航空基地の防空能力の強化／重要施設周辺のミサイル防衛システムの配備;(2) 特殊部隊への防御の強化／航空基地防衛の多角化; (3) 港湾における海軍艦艇の脆弱性の削減;(4) 指揮管制・通信・コンピュータ・情報・監視・偵察システムの脆弱性の克服;(5) 高高度核爆発効果の抑制・緩和／同盟諸国の能力の向上;(6) 弾道ミサイル防衛の改良等の措置が必要である。

3 「エアシー・バトル」;戦力投射の課題

中国やイランに最新軍事技術が普及し、米国の西太平洋やペルシャ湾へのアクセスは新たな挑戦を受け、そのリスクとコストを軽減する戦略的選択肢が求められる。新たな作戦概念「エアシー・バトル」は、中国やイランの A2/AD 能力を新たな戦略的挑戦と受け止め、米軍の戦力投射能力への挑戦に焦点を当てている。両地域は大陸と海洋の交差領域であり、空軍と海軍だけでなく陸軍や海兵隊を含んだ統合的な作戦構想である。既存の近代戦との作戦環境の相違—例えば人道支援等—を認識し、戦争や戦闘の概念的変化を視野に入れたものである。また、前方基地の脆弱性は米国の抑止的行動を阻止・阻害する要因となり、その非脆弱化も作戦構想の一部に含まれている。米国のインタレストへのアクセスにコストとリスクが負荷される場合、これを排除することが米国の戦略的伝統であった。戦力投射能力の確保と確保は、米国の世界戦略の根幹を成すものである。したがって、「エアシー・バトル」は、米国の戦略的伝統に合致した構想でもある。

結　論

「戦力投射」や「シーパワー」が新たな概念ではないのと同様、海洋諸国は、常に A2/AD の脅威に直面してきた。両大戦のドイツ潜水艦戦やソ連海軍のゴルシコフ戦略は、今日的には”A2”である。ベトナム戦争は民族解放戦線の AD 戦略であろう。したがって、これに対抗する「エアシー・バトル」は、伝統的な戦力投射作戦の文脈に位置している。しかし、A2/AD 脅威は段階的に変化してきている。1990 年代から 2000 年初頭にかけて、A2/AD は「非対称(asymmetric)」脅威であり、ゲリラやテロ、ローテク兵器等が焦点となっていた。今日、その脅威は必ずしも「非対称」ではなくなった。中国の戦力は、局地的には米海軍や同盟国との対等な戦闘能力を拡大している。したがって、「エアシー・バトル」は、通常紛争に備える作戦構想であり、敵勢力の A2/AD 脅威に対応することが安全保障戦略の中心的選択肢になりつつある。最終的には、作戦から安全保障全般にわたる

© Institute for International Policy Studies 2011

広範な領域を網羅するものとなろう。したがって、「エアシー・バトル」は概念上、米国の戦力投射能力の「レコンキスタ(失地回復)」と評価することができよう。「エアシー・バトル」という新たな作戦概念は、中国とイランによって引き起こされる軍事的挑戦に直面して、米国の戦力投射能力を評価し、維持することを目的としたものである。

（本稿は、拙稿「エアシー・バトルの背景」(『海幹校戦略研究 1-1』(2011 年 5 月))を要約したものである。）

以上

© Institute for International Policy Studies 2011